
番外編 テスタロッサ家のご近所さん

たかB

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

番外編 テスター・サ家の「近所さん

【NZコード】

N2476BA

【作者名】

たかB

【あらすじ】

本編のリリカルなのか?がシリアルスキンなので息抜きに書きました。
設定がかなり変化しています。

第一話 テスター・ロッサ家の「近所さん」（前書き）

まえがき

本編のリリカルなのか？がシリアル続きなので息抜きに書きました。

設定がかなり変化しています。

第一話 テスターの近所さん

ツルギ：十五歳。普通の中学校卒業と同時にサカサの実験台にさせられている。魔法に対抗すべき電動兵器のテストパイロット。本編と変わらず才能のない馬鹿。フェイトの事を異性として感じ始めていて、時折大胆なフェイトの言動に戸惑う。

サカサの助手（おもちゃ？）と、いう形でミシードの局員として働いている。

フェイト：十四歳。普通の中学生。アリシアのクローナン。過去にそれで苦しんでいたがツルギのある一言で払拭。それ以来、ツルギにご熱心。その一言を今回の番外編でそれを紹介。：本編にも使う予定。

テスターの一家。

プレシア・シングルマザーで管理局員。研究所の局長。年齢：負傷（作者が）もとい不詳。アリシアが内臓に重傷を負い、フェイトというクローナンを作つて、フェイトを殺し、その臓器を使い治療しようとしたがツルギとサカサの抗議及び抗戦によりその考えを捨てる。

アリシア：二十歳。プレシアの助手を務めている。フェイトの事を溺愛と言つてもいいほどかわいがる。ツルギとどうにかくつつかないかと避来矢と暗躍することもある。過去に移植しなければ死ぬとまで云われた怪我をサカサに治してもらつたことがある。

アルフ・リニス：普通のペット。

月野一家。

サカサ：二十一歳。プレシアの元部下。プレシアとは違う研究所

で局長を務めている。現在、魔力ではなく電動兵器。ぶっちゃけ工Sに近い物を作っている。申請するかどうかでブレシアと口論になつていて。ツルギの実兄。趣味は機械いじりとツルギいじり。

アリシアを瀕死の状態から助け出した天才的な医術の持ち主。普段は管理局の研究者。

避来矢：黒目・黒髪ボニー・テールのお嬢様。サカサのスポンサー。イメージはハイスクールD×Dの姫島朱乃。二十一歳。アリシアと仲がいい。独特な喋り方は変わらない。

本人は秘密にしているがサカサに惚れている。

ミネルヴァ：サカサの作ったI.S イン○イニット・ストラトスもどき。動力は魔力と電気のハイブリット使用。インテリジェントデバイスのように意思の疎通が可能。まだ、試作段階。イメージは第二次スーパー口ボット大戦Zの主人公機ブラスター。人格は子供っぽい。なぜか避来矢のことを「おとーと」と呼ぶ。

ちゅんちゅん。

今日も雀の鳴き声で日が覚める。

私、フェイト・テスタロッサの朝は早い。

「…ごはん。作らなきや」

昨日はお母さんとお姉ちゃん。そして、珍しく、サカサさんとツルギが揃つて研究所から帰つてきた。

本来なら、もう少しうつくり眠れるんだけどあの四人が揃つて朝ご飯を食べるのは久しぶりだから早く準備しないと…。

「むにゅー、フヒイト」

体を起しきりうると隣で寝ていたお姉ちゃんが私の腰に手を回して抱きついていた。

起こさないようになーっと手を外してベットから出る。

そして、布団をかけ直して一階にあるお風呂でシャワーを浴びてから台所へ向かう。

「……いや、たたらとこはが一ぱりっぴしむのおゆおりれ」

「ひつまつへーひは…」

お母さんとサカサさんは一階の居間で何やら研究書類の山の中で突つ伏したまま寝ていた。

二人とも寝言で意思の疎通をしている。

サカサさんは母さんの元部下だつたけど、魔導師でない人間が魔導師に対抗すべき兵器を作ると意気込んで母さんの研究所を脱退。後に避来矢さんといひどこかのスボンサーさんと契约をして独自の研究に務めている。

なんでもため込んだ魔力の結晶を原動力にして使用者のバリアジャケツト。及び、魔法弾なる物を作つて、管理局に売り込もうと日々研究を重ねている。時々、ジュエル？ジェイル？なんとかといふこれはまた別の研究者の人とよく居酒屋で飲み合ひらしい。

母さんはといつと、サカサさんが作り上げた魔道兵器マジックアーマー。…そのままだね。の設計図を見て討論となり、結局昨夜の遅くまで報告書と設計図の飛び交う羽目になり今に至る。

そういうえば、部下の時から無茶ばかりをするとか言つていたような…。

「あ、フロイト。今、起床？」

「うん。おはよー。避来矢お姉ちゃん

黒い髪を揺らしながら避来矢のお姉ちゃんはリースとアルフの器にペットフードを入れている。

「謝罪。私、動作。貴女。起床、原因？」

申し訳なさそうに避来矢は頭を下げる。自分が起こしたのではないかと考えているんだろうけどそうじゃないよ。

「ううん。避来矢お姉ちゃんの餌やりの音でじやないよ。今日はみんなの分の朝ご飯を作ろうと思つて…。アルフは？」

お客様でお嬢様なのにサカサさんのスポンサーになつてからは家族ぐるみで付き合つようになり、よくうちで寝泊まりをしている。そのため、その動作に堅苦しさは見当たらない。

「ツルギ、アルフ、散歩。又は、徒競走」

「… そらんだ。じゃあ、みんなが揃つ前に、」飯を作りうが

「私、支援、同伴」

「大丈夫。私がやりたいんだ。みんなが揃つ前に、」飯を食べてほしいから

「…了解。私、サカサ、フレシア、書類、整理、移動」

「うん、お願ひね」

私が台所で支度を開始し始めるとい、後ろで母さんとサカサさんを移動させている音と声をBGMに私は袖をまくる。と、

「サカサ、フレシア。起床要求」

「…ほーりょるはまほふ」

「ほーぐーほんはひいら」

「…（怒）」

ブチュギュードル！

居間で聞こえてはいけないよつた音と一人の悲鳴が背後で鳴り響いた。

「「んああああああああああああ？！…？」」

避来矢！何したの！？

第一話 テスターの近所さん（後書き）

あとがき。

まあ、時々。本編と同時もといドンガメ進行でお送りします。
これはリリカルなのか？のエフストーリー。

二次創作なのにエフもどうよ。と思うこともあります、ここでは全編コメディー（ラブも含む）かつ、フェイトを主人公に書いていきたいと思います。

ツルギとミネルヴァ 次回に出すよ。

…平和が一番だとつづく想ひよ。

第一話 月野家のね隠れん。（前書き）

シリアルは一切ない。

コメディ一色を田指してドンカメ更新を田指します。

第一話 月野家のお隣さん。

「ノルマ、カンリヨーワ」

ネックレスで胸元にぶら下げた小さなビー玉サイズの琥珀色の水晶玉。インテリジョントイバイスもどき。なんでもどきなのかといつとまだ、正式名が決まっていないから。

魔力のない俺でも使える魔法機器のテストパイロットとしてやってきた。なにやらあべこべなやつだが、中学卒業と共にサカサからミルヴァを渡されてから早一か月。

ミルヴァに俺の体の動きを覚えさせる準備期間も今日で終えて、明日から本格的に実施訓練及び実験を行う。

俺こと月野剣はとある事件をきっかけに、知り合ったテスタロッサ一家の隣人^{サガサ}の居候として、この春から始めた日課のランニングを終えて思い切り背筋を伸ばす。

ミルヴァから本日のランニング終了の合図を受け取ると俺は立ち止まり、大きく背筋を伸ばす。

「よーし、今日の所はここまでにするか、アルフ」

「ワソ」

「キタク、キターク」

一緒にランニングした大型犬（本当は狼）のアルフにそう伝えるとアルフは尻尾を振りながらこちらに向かつて吠えた。

グシグシとオレンジ色の毛並みの頭を撫でると、俺は一度自分の家戻ることにした。

昨日はサカサとプレシアさん、アリシアさんが何やらギヤーギヤー言いながら帰り道は騒がしいものとなつた。内容が俺には難しうさぎるから覚えていない。

お隣さんであるアリシアさんは家に帰るなり出迎えたフェイトに抱きつき、姉妹揃つてお風呂に直行した。

お風呂へ向かいながら服を脱いでいくアリシアさんと脱がされていくフェイト。思わず目をそらした。が、

…ぱつちり見ました。…姉妹揃つて黒だつた。似合っていた分、まぶたの裏側に、鮮明に焼きついていた。おかげで昨夜はなかなか寝付けない夜だつた。

アリシアさん。ありがとうございます！

「ムツツリ」

…ミネルヴァの発現に否定が出来ない自分が悔しい。

ちなみにフレシアとサカサはそれに気づかずにテスタロッサ家の一階にある居間に戻つてからも討論を続けていた。

今朝、日課のランニングをしようとしていたら避来矢の姉ちゃんがテスタロッサ家に入つていくのが見えた。向こうも俺に気づいて軽く挨拶を済ませると庭の方からアルフが柵の向こうで尻尾を振つてお出迎え。

口にはリードを咥えて。ちゃつかりした狼である。

まあ、迂闊に一人で出れば捕まるかもしないので俺の「ランニングにアルフも付き合つてもらうこと」にした。

帰宅した俺とアルフは驚愕の光景を目にすることも知らずに。まさか、こんな状況に陥るとは夢にも思わなかつた。

「ただいうわあああ！何がつたんだ、白い書類の上に赤黒い血が！？ミステリー殺人！？」

「きゃんきゃん！」

アルフは俺の背中に隠れるかのように飛び移る。震えるなアルフ。俺だつて怖いんだ。

田の前には血の付いたモーニングスターを肩に担いだ避来矢の姉ちゃんがいた。

あれは悪魔だ。：血の付いたトゲ付き鉄球の先に紫と茶色の長い髪がくつづいていた。

謎はすべて解けた！

サカサとフレシアさんは彼女にやられたんだ。

「避来矢は田の前にいる。被害者遺族の名に懸けて！」

「…ツルギ」

「はい！」

「全力防護態勢要請」

「…え、どうこう意味」

「歯、クイシバレ」^ハ

何で！？

「ツルギ、口、禍、元凶」

「クチハ、ワザワイ、ノモト」

どうやら俺は失言をしてしまったようだ。

「アルフ、俺さ。明日、初めて局員の初めての給料が入るんだ」

- ۲۷ -

「フロイトやアリシアさんに夕飯を奢る約束をしているんだ」

「ワフウッ！？」

だつ。

クイックターンを行い全速力でこの場を離れる。今の俺ならウイングロードよりも早く動ける！

だかしがし、

「残念」 「△ネン」

しかし、避来矢からは逃げられない。

何故か、自分で逃げ道を塞いだ氣がするのは氣のせいいか?

「…ごめん。フエイト。…俺、約束。…守れないみたいだ」

〔避来矢、チャント、テカゲンシロヨ〕

…//ネルヴァア。折檻をさせないよつて要求するとかはないのか?

「ツルギ、要求。不許可」

俺はこれからどうなるんでしょうか?

〔YOU DEAD〕

DEATHよねー。

「あ！」

ツルギの悲鳴から一分後。

アリシアが寝室から居間の方に来るとそこには三人分の（肉汁）ミートソースのかかつたオムライスが準備されていた。とか、どうとか。

第一話 月野家のお隣さん。（後書き）

たかB 「誰も死んでいないよ。作者の名に懸けて！」

ツルギ・サカサ・フレシア 「「「当然だ！」」」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2476ba/>

番外編 テスタロッサ家のご近所さん

2012年1月8日18時49分発行